

第2節 日本の小学校外国語活動における文字学習の導入

—絵本を用いた多読多聴—

執行智子・カレイラ松崎順子

要約

本研究では、音声の出る絵本を自主的に読む活動を10日間行い、その後、本活動をどのように思ったかについて、また本活動中に認識したと児童自身が思った語について列挙する自由記述形式のアンケートを実施した。その結果、本活動を肯定的に受け入れていた児童は半数以上に及び、もっと続けたいと記述した児童もいた。また、86%の児童が本活動で分かった語があったと述べ、一番多い児童においては14語挙げている。記述されている単語は、色や動物が多かった。さらに、少数ではあるが日本語の介在しない本活動を受け入れにくい児童もいたが、概ね、音声が出る絵本は、児童が自主的に読みながら何らかの語彙を学習でき、親しみやすい活動であることが分かった。

キーワード

多読多聴、音の出る絵本、自主性

1. はじめに

2011年から小学校において外国語活動が開始される。小学校における外国語活動はいかに行われるべきか。すでに、文部科学省(2008)の小学校学習指導要領の外国語活動編では「体験的理解」、「積極的にコミュニケーションをとろうとする態度」、および「外国語の音声や基本的な表現に慣れ親しむ」の3本柱をもとに外国語活動を行なうように示唆している。さらに「音声を取り扱う場合には、CD、DVDなどの視聴覚教材を積極的に活用すること」とある。

本研究の対象校は、この文科省の指導要領に沿って外国語活動を行なうためのカリキュラム開発や評価について継続的に研究している公立小学校で、児童が自発的に目的を持って外国語活動に取り組むことに重点を置いている。この小学校において、USBメモリーの内蔵されたペンで絵や本文に触れると音が出るという絵本を用いて、授業時間外に外国語(英語)の絵本の多読多聴を5年生に集中的に行った。日本の小学校外国語活動(週1時間、年間35時間)では、「外国語の音声や基本的な表現」に慣れ親しむために必要なインプットが不足されると思われるが、本研究では、このような機器を使用する多読多聴が、児童に積極的に受け入れられ、その結果語彙を認識できるほどのインプットになりうるかどうかについて論ずるものである。

2. 研究対象校の外国語活動

(1) 研究対象校概要と背景

研究対象小学校は、東京副都心近くにあり、児童数は約400名12学級からなる区立の小学校である。場所柄、外国籍を有する児童が約1割、また、母親が外国人である児童が複数在籍している。以上のような事情を踏まえ、国際理解教育を学校活動に積極的に取り入れている。たとえば、外国人の母親(保護者)の協力のもと、それぞれの国の文化について紹介する「韓国ウイー

第5章 未来型のこどもの外国語能力と促進法

ク」や「タイウィーク」などが行われている。そのほか国際交流として、「青年の船」や内閣府青少年国際交流事業の一環としても数カ国からの青年たちの訪問を受けたり、学区域にある早稲田大学の留学生との交流（アウトリーチ・プログラム＝異文化理解教育支援）や近隣にある日本語学校の学生たちと交流する機会を年に1～2回設けている。

（2）研究対象校の研究と実践

①研究対象校の研究

実験対象校の言語教育（コミュニケーション教育）の研究は平成12年度から始められた。さらに、平成19年から、新宿区教育委員会研究発表校、文部科学省「小学校における英語活動等国際理解活動推進事業」拠点校として、英語活動の工夫改善について研究活動が行われ、さらに平成21度からは文部科学省「外国語活動における教材の効果的な活用及び評価の在り方に関する実践研究事業」研究校を受け、引き続き教材および評価の研究が行われてきた。

平成19年度からの研究対象校の研究では、「(外国語活動) 英語活動を通してことばの力を育てる」を主題に掲げ、カミンズの“相互依存原理(Interdependence Hypothesis)”を理論的背景として、母語以外の言語教育(英語)が行われることにより、どちらの言語(日本語と英語)にもその根底に存在している共通部分である「ことばの力」がよりしっかりと育つであろうという仮定に基づき、外国語活動(英語活動)について研究してきた。さらに、「ことばの力」を「理解する力(ことばを通して知識を増やしたり理解したりする力)」、「考える力(自分の考えをつくる力)」、「表現する力(相手に伝わるように表現する力)」、「聞く力(相手の伝えたいことを理解しようとしながら聞く力)」そしてこれら四つの力を支える「メタ言語感覚(言語自体について気付く力)」から成ると定義し、最後に挙げたメタ言語感覚を鍛える外国語活動の実践に努めてきた。

②研究対象校の外国語活動のカリキュラムと授業

研究対象校では、1年生から6年生までの全校で外国語活動を行なっている。1～2年生は15時間、3～4年生は25時間、5～6年生は35時間が各々の学年の外国語活動(英語活動)の1年間の規定時間数である。また、授業は担任と Assistant language teacher (ALT, 区から配置) のチームティーチングで行うことを基本としている。

1年生から3年生までは歌やチャンツを通して英語に親しみ、絵本を題材に、英語を体感することに重点を置き、活動自体を楽しむことが目標である。学年が上がるにしたがい、グループ活動や創作活動、さらに発表を最終目標とした単元が多くなっていく。特に、5年生からの活動では、それぞれの単元がテーマや言語材料などで関連しあいながら、6年生の3学期に行う自分の将来の夢を英語で語る活動に到達するように設定している。また、一つの単元の中でも、初めの方は活動に必要な言語材料に触れる時間を多く取るようにし、活動回数が重なるにつれ、自分たちで工夫し作り上げる活動を増やしていくように組んでいる。

さらに、児童の主体的な活動になるように以下の点を留意し、授業計画を作成している。

- ・取り上げる題材は、児童の日常生活に密接なものや教科で学習した内容に密接なもの、また創造性のあるものを選択する。
- ・目的意識を明確化するために、学習者である児童自身が、その単元のゴールと見通しを理解し、活動の目的を知るようにする。

第5章 未来型のこどもの 外国語能力 と促進法

- ・学習形態(ペア, 小グループ, 学級)を工夫し, それぞれの児童の認知力に合うようにする。
- ・教え込むのではなく, 児童が自ら発見したり気付いたりするように活動を計画する。
- ・自己尊重・他己尊重のために, 自分の学びを自覚し, 友達同士が認め合えるように振り返りなどを活用する。

3. 理論的背景

2011年から開始される外国語活動では, 音声中心の活動となっているが, 中学校から音声指導同様文字指導も開始される。これを考慮すれば, 小学校の段階で文字の導入をした方がよいのではないだろうか。ただし, 小学校外国語活動での文字学習には賛否両論あり, 小学生の過重負担になりかねないという意見もある。どのように, また何を指導するのかなどについては議論の余地が残っていると思われる。

台湾の一部の学校で, 多読(楽しみのための読書)の授業の指導が開始され, 子どもたちが自由に本に接することができるよう環境を整備したところ, 付属の音声(テープやCD)を聞きながら, 一人であるいは友だちと文字を追う姿が見られたという報告がある(バトラー, 2005)。これは, 母語習得において, 読み書きが未習得の幼児が, 絵本の読み聞かせを通して, 文字に親しみ, 次第に読めるようになる過程に非常に似ている。文脈のついた音声, それをあらわす文字と絵の3つの要因が, 母語においても読みを促進する(c.f. Adams, 1990; Treiman, Weatherstonn, & Berch, 1994; Treiman, Tincoff, Ruth, & Eichemond-Welty, 1997)ように, 第二言語習得においても読みを促進するといえるようである。

また, Nagy (1997)によれば, 言語習得で重要な鍵となる語彙習得は, 単に語の辞書的意味を覚えるよりも, 読書で文脈に埋め込まれた語にたくさん出会う方が効果が高いというのである。様々な文脈の中で同じ語に繰り返し出会うことは, 抽象的な辞書的な意味を暗記するよりも, その語の意味を深く理解することにつながるという。以上のことから, 読書, 特に楽しみで読むことは, 文字に親しみ, 読みを促し, 語彙習得にも役立つといえるようである。

4. 本研究の目的

USBメモリーの内蔵されたペンで絵や本文に触れると音が出る絵本を用いた多読多聴が, 音声中心の外国語活動を経験している日本の小学5年生にどのような影響を与えるであろうか。上記で見てきたように, 多読多聴が効果があるとすれば, 児童は, 絵本の文脈の中で出会った未知の語の意味を理解し, 習得できると思われる。また, まだ外国語の読み書きを学習していない児童にとって, 文字の入った音声付きの絵本を自主的に読むことは受け入れられるのだろうか。以上2点を論ずるため, リサーチクエスチョンを以下のように設定した。

- ①児童は多読多聴をすることで自ら分かったと思った語があるか。
- ②もしあったのであれば, それは何か。
- ③児童は多読多聴をどのように思うであろうか。

5. 研究方法

(1) 研究対象者

第5章 未来型のこどもの外国語能力と促進法

研究対象者は研究対象校に在籍する5年生の2クラス児童70名であった。上述したように、本研究に参加した児童は入学してからすでに、115単位時間の外国語活動（英語活動）を経験してきた。

(2) 教材

多読多聴には、Leapfrog社の絵本8種類とペン（本の中の文、単語、スペルに触れるとを読み上げたり、また、背景に描かれてある登場人物や物などに触るとセリフを言ったり、効果音を流したりする）を各自1本用意した。使用した本は以下のとおりである。

- ・ *1-2-3 Dora!* (数)
- ・ *The Opposites* (反対語)
- ・ *ABC Animal Orchestra* (アルファベットと動物の名前, 楽器の名前)
- ・ *Pooh Loves To...* (クマのプーさん)
- ・ *Curious George Color Fun* (色)
- ・ *National Geographic Kids(tm): Activity Cards - Land Animals* (動物)
- ・ *National Geographic Kids(tm): Activity Cards - Birds and Sea Animals* (鳥と海の動物)
- ・ *Super Speller* (アルファベットとそれがつく言葉) .

図1 教材に使用した絵本



(3) 実施手順

2010年2月末より3月にかけて、2週間（10日間）毎日10分程度、各クラスの都合のよい時間に、上述した教材を使用し、自分の席で好きな本を読むという多読多聴の時間を設置した。

多読多聴実施2週間後に自由記述の質問紙調査を実施した。質問事項は以下のとおりである。

質問1) 英語の本から分かったことばをあげてください。

質問2) この読書についてどう思いましたか。

なお、本質問紙調査はクラス担任の教員によって行われた。

6. 結果

(1) 児童は多読多聴をすることで自ら分かったと思った語がある可能性

質問1「英語の本から分かったことばをあげてください」に対して、全体の86%の児童が1つ以上の語を挙げおり、内39名の児童（57%）は、5つ以上、3名（4%）は、10語以上を挙げていた。最多は14語であった。一方10名（14%）は、空欄か、何も覚えてない、分からないなどと答えていた。ゆえに、多読多聴をすることで児童が語を自ら認知したと思う可能性はかなり高いといえるであろう。

(2) 児童が多読多聴によって分かった語

質問1「英語の本から分かったことばをあげてください」に対して、児童の記述は、カタカナで英語の音通りに表記されているものもあれば、それに相当すると思われる日本語の意味を表す語で表記されているものもあった。中にはカタカナで音を表記したものと日本語の意味を書いたものをまぜているものも見られた。最も多く記載されたのは色に関するもの（赤、青、黄色、緑、だいだい、くろ、紫、水色、白、レッド、イエロー、ブラウン、ブルー、オレンジ、グリーン、パープル）であった。ある児童は『おさるのジョージ』の絵本が色を全部覚えられたし、そのよこにある色の物を何回も（ペンで）押していたらほとんど覚えられた」と述べている。次に多かったものは動物に関する語（キリン、タスマニアンデビル、キリン、フクロウ、ゴリラ、ナマケモノ、トラ、シマウマ、タコ、ブタ、カタツムリ、タカ、トド、カエル、くじら、ぞう、くま、さる、へび、ちょう、うさぎ、ねこ、いぬ、ライオン、フラミンゴ、オランウータン、カンガルー、エレファント）であった。特に、男子児童12人が「キングコブラ」という名詞をあげていた。彼らは、キングコブラのような強い動物に興味を持つ年齢なのかもしれない。

ほとんどの児童が挙げている言葉は名詞であるが、「さわる」「走る」などの動詞や、「スロー」「ウエット」「ぬれてること」「ドライ」などの修飾語を挙げている児童も少数いた。これらの語のほとんどは本の内容の中で使用されているが、「さわる」は本の操作について本の最初の部分で何度も言及されている語であることから、「さわる」と書いた児童は本を最初から注意深く聞いていたものと思われる。また、「ぬれていること」は、絵から聞こえてきた英語を説明しようとしているものであり興味深い。

以上のように具体的な語を挙げている児童のほかに、語の種類を表す上位語を述べている児童もいた。たとえば、「色の単語」「色」「にじ色」「くだもの」「動物の名前」「楽器の名前」「アルファベット」「形」「自分の紹介」「あいさつ」などである。児童は10歳か11歳であるため、日本語ではものを種類別に分類しその範疇を述べることができるのが当然である。この記述はこの

第5章 未来型のこどもの外国語能力と促進法

知識を英語にも転移したものと思われる。さらに、「自己紹介」や「あいさつ」に含まれることばは普段の外国語活動でひとまとまりとして使用される慣用的なものであるため、本の中で出会った時もひとまとまりとして聞こえたであろうと思われる。その結果「自己の紹介」や「あいさつ」の中の具体的なことばでなくそれらを一言で表すことのできる表現（「自己の紹介」や「あいさつ」）で記述したものと思われる。

このほか、「ふうせん」「レントゲン」「はなたば/花」「ペンキ」「はちみつ」「鳥」「まる」「さんかく」「しかく/正方形」「はろう/こんにちは」「グッバイ/バイバイ/さようなら」「ぼうし」「女王」「アウトサイド」「インサイド」「頂上」「橋」「ろけつと」「どおろ」「みずたまり」「長方形」「六角形」「ながまる」「バケツ」が挙げられていたが、後半9語（頂上、橋、ろけつと、どおろ、みずたまり、長方形六角形、ながまる、バケツ）は、本の中での言及はなかった。これらの語を記述した児童は、描かれている絵のみからの推測で書いたものと思われる。

(3) 児童が多読多聴をどのように思ったか

質問2「この読書についてどう思いましたか」に対して、半数以上の児童は「楽しい」や「もっと読みたい」と述べている。一人の児童は「日本語じゃなくても楽しく読めたので良かったです」と述べ、英語での読書は日本語での読書と同様に楽しめる可能性があることを表している。また別の児童は「動物のやつがおもしろかった」と具体的に興味があった本について述べている。

6名の児童は「英語のことばを覚えることができた」と述べ、「何を言っているのか分かった、英語が分かった」と述べている児童は12名いた。その中には、「この本を使うとふつうにやるより楽しくておぼえやすかった」や「しゃべる絵本を使って、いろいろな単語が分かりました。今英語を習っているので、英語の授業の役に立ちました。声も出てきてとても分かりやすかったです」と述べ、楽しく自習したことを表している児童もいた。

また発音に関して言及している児童もいた。「発音が変なので、わかりにくかった」や「日本人がしゃべる英語の発音と外国人がしゃべる英語の発音と少しちがって聞きとりづらかったけど、少し知っていた単語とかがでてきたので、なんとなく分かりました」など、普段の外国語活動では、一人のALTしか触れていないので、複数の母語話者の発音に少々戸惑い、同じ単語でも人によって多少の音のズレがあることを知ったり、児童自身の知識と描かれている絵を手掛かりに本の言っていることばを分かろうとする積極的な読書に対する態度がうかがえる記述もあった。

さらに、一人で行う多読多聴の長所を言及している児童もいた。「何度でも同じ単語が聞けるので発音がわかりやすく、よく覚えることができた」という記述は、多読が自分の読書のスタイルやペースを崩さずに読めることを表している。「英語は分かったけどスペイン語が『ドーラ』の本にのっていたからスペイン語が分かった」と書いた児童は英語圏からの帰国子女であるので英語はある程度読むことができる。彼女は、英語以外に聞こえてくることばを、英語を手掛かりにして理解したと思われる。つまり、多読多聴では読み手は自分のレベルに合わせた読み方ができるということを意味している。

また、この読書に対して否定的な記述も見られた。「最初は楽しかったけど、だんだん最初みたいには興味をもたなくなった」という記述には、実験者側に準備した本が8種類であったという背景があり、10日間では同じ本を繰り返して読まなければならない日もあったため、もっと

多くの本を読みたい児童には物足りなかったのかもしれない。「文章になると、話す早さが早くなったので、分かりにくく、聞き取りにくかった」という記述では、母語話者が文を読むスピードは、単語を一つ一つ言っているときよりもはるかに速く抑揚が大きいために、英語学習の初心者である児童がすべてを聞こうとするのは難しいことだったことを物語っている。しかし、この記述からも「聞きたい」「分りたい」というこの読書に対する積極的な態度が伺える。さらに、一人ではあったが、「日本語が流れたら文字や読み方が覚えられるんじゃないかと思った」と記述している児童がいた。音、文字、絵からの推測が日本語の介在で確かめたいという児童の個性の現れであると思われる。

7. 考察

本研究の目的は、外国語活動を継続的に研究している公立小学校において、外国語による多読多聴がどのように児童に影響するかを論ずるものであった。結果から、参加した86%の児童は、多読多聴によって分かった英語のことばを記述することができたことから英語の語彙を増やしたといえるであろう。その中にはそれまでの外国語活動の中ですでに触れてきた語もあったが、それらを挙げた児童にとっては、今回の多読多聴の中で初めてその語に気づき注目したものである。つまり、インプットは、学習者が自発的に意識的に気付いた時に初めて意味のあるものとして、学習者の中に吸収されるということである。この意味においては、今回の多読多聴において児童は初めてそれらの語に気づき吸収したと言えるであろう。ただし、その語が児童の記憶に残るかどうかは本研究では検証されていない。

さらに、児童が一番多く言及していたものは色に関する語であり、次は動物であった。一方、一番多くの時間、ペンで触れた本は表1にあるように、『*Pooh Loves To...*』であり、二番目は『*I-2-3 Dora!*』であった。前者は、くまのぷーさんの日常を描いたものであり、色や動物に関する記述のみがあるわけではない。後者は、数と果物に言及が多く、色や動物に関する記述は前者同様にあまりない。このことより、よく読んでいた、つまり多くの時間を読むのに費やしている本だからと言って、その本に記載されている語に児童が多く注目しているわけではないようである。これら2冊に関しては、人気のキャラクターが中心となっているために、児童が関心を多く示したため、長い時間ペンでその本に触れていたのであろうと考えられる。

また、ほとんどの児童は多読多聴を積極的に受け入れていたと思われる。半数以上の児童は楽しいとか、もっと続けたいと記述しているし、英語のことばを覚えたとも記述していた。中には1冊すべてを覚えたという児童も見られた。児童の記述の中にあつたように、多読多聴では、自発的に好みの本を選択し、読み方や読む場所を規定されることなく、自分のレベルに合わせて読むことができる。また、読後内容確認などの作業を課されないため、自分が楽しむという目的のためにだけ読むことができるのである。このような多読多聴の特徴が児童の自ら読みたいと思う気持ちを促進したといえるのではないだろうか。ただし、一人の児童の記述から、文脈のみに頼った推測的な読み方だけでなく、その推測が正しいかどうかを確かめたいという個性を持った学習者もいることを考慮に入れるべきであることも分かった。

以上のことから、2011年から施行される小学校外国語活動で見込まれるインプット不足を、Leapfrog社の絵本のような機器を使用した多読多聴で補うことは可能であるように思われる。た

第5章 未来型のこどもの外国語能力と促進法

だし、このような結果がでたのは、普段から外国語活動が自律性を育てるようにプログラムされていることが大きな要因であることを記しておきたい。学習者が教師からことばを与えられるだけの受身の外国語活動ではなく、自分のことばを作り出す有意義な活動を繰り返してきたことが、多読多聴を積極的に行う態度につながったと思われる。

8. おわりに

語彙習得はコミュニケーションを潤滑にするためには欠くべからざるものであるが、週1時間程度の小学校で行われる外国語活動では、語彙習得に必要な文脈のついた語に出会う機会が希少であることが推察される。本研究は、自律的に学習する態度を普段から養うよう計画された外国語活動を経験している児童が、多読多聴を自律的に行うことで、その語彙不足を補える可能性があることを検証し、このような方法が語彙習得の一つの手段として考えることができることを示唆した。ただし、今後、どのような機器が日本の小学校に適しているのか、また、機器の使用と外国語活動の内容および方法にどの程度関係があるのかなど、詳細な検証が必要であると思われる。

9. 参考文献

- Adams, M. J. (1990). *Beginning to read: Thinking and learning about print*. Cambridge: MIT Press.
- Brown, H. D. (2007). *Principles of language learning and teaching*. 5th ed White Plains, NY: Pearson Longman.
- Krashen, S. D. (1989). We acquire vocabulary and spelling by reading: Additional evidence for the input hypothesis. *The Modern Language Journal*, 73, iv, pp.440-464.
- Krashen, S. D. & Terrell, T. D. (1983). *Natural Approach: Language acquisition in the classroom*. N.J.: Alemany Press.
- Nagy, W. (1997). On the role of context in first- and second-language vocabulary learning. In Schmitt, N. and McCarthy, M. (Eds.) *Vocabulary: Description, acquisition and pedagogy*. Cambridge ; New York : Cambridge University Press.
- Treiman, R., Weatherstonn, S., & Berch, D. (1994). The role of letter names in children's learning of phoneme-grapheme relations. *Applied Psycholinguistics*, 15, pp.97-122.
- Treiman, R., Tincoff, Ruth., & Richemond-Welty, E. (1997). Beyond zebra: Preschooler's knowledge about letters. *Applied Psycholinguistics*, 18, pp. 391-409.
- 新宿区立戸塚第一小学校. (2009). 『平成20年度 研究発表紀要』
- 高島英幸. (2009). 「小学校外国語活動ではプロジェクト型で！」『英語教育』. 2009. 4～9月号.
- バトラー後藤裕子. (2005). 『日本の小学校英語を考える』. 三省堂.
- 東野裕子. 高島英幸. (2007). 『小学校におけるプロジェクト型英語活動の実践と評価』. 高陵社書店.
- 文部科学省. (2008). 「新小学校学習指導要領」
- 吉田研作. (2003). 『新しい英語教育へのチャレンジ—小学生から英語を教えるために』. くもん出版.
- 吉田研作・柳瀬和明. (2003). 『日本語を活かした英語授業のすすめ』. 大修館書店.